

感謝祭でポストン近郊に招かれた。たった一日で、アメリカ合州国建国神話のお洒いが出来たのには驚いた。ポストン西、レキシントンからコンコードに至る街道は、ミニユットマン国立歴史公園に指定されている。独立戦争の象徴的なきっかけともなった古戦場だからである。植民者たちがコンコードに武器・弾薬を集結しているとの情報に、その捕獲、処分に向かったイギリス軍千七百は、1775年4月19日、コンコード川の北橋を挟んで植民地民兵と対峙する。平家物語の宇治橋の合戦やら盧溝橋事件やらが脳裏を掠めるが、一発の銃声から事態は急展開し、敗走するイギリス軍は、ゲリラ戦に徹して神出鬼没の狙撃を繰り返す植民地側民兵の餌食となり、チャールズ・タウン到着までに都合二五〇名に昇る死傷者を出す。

その戦端となった(但し死傷者は若干三名の)「北橋」は、多数の「参拝客」を集める。独立戦争記念碑として、北米合州国市民たるもの、一度は詣でて家族で記念写真に収まらねばならない。長さ20メートルに満たない木製の太鼓橋を挟んで、東岸には石碑、西岸にはダニエル・チェスター・フレンチによる、少年精鋭民兵(ミニユットマン)のブロンズ像があって、橋の東を睨んで佇立する。とはいえ、これらの記念碑が建立されたのは、ようやく1875年のこと。日本でいえば、明治維新と憲法発布の間にあたる時期に、ようやくアメリカ合州国の建国神話も確立されたわけだ。現在の木造の橋も、実は1957年建造の四代目。百年祭のおりには、橋そのものが存在せず、記念式の為に設えられたのは、まるで万国博の東南アジア風コロニアル・スタイルとでもいった、装飾過剰なパヴィリオン。中央には半円形の亭まで載っていた。ここが日本だったら何が建つかしら。明治神宮の大鳥居かな、とは友人日本学者夫妻の問答。

この古戦場から南に3キロも行かぬところに、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『ウォールデン』の池がある。まるで人里離れた大自然のなか、という印象はまったくのまやかしの錯覚で、ソローは毎日食事を

運戦② 建国神話の産土

内務省歴史博物館記念公園を訪問するお上りさんの感想

作ってくれる母のところに戻っていたような。池のすぐ南西には、鉄道線路も走っていた。駐車場を降りると、側に見慣れた小屋があって、ほぼ等身大のソローの銅像が出迎えてくれる。むろんこれはレプリカ。池の東の入江の林間の跡地を訪ねると、古老たちがここだと指した場所に、賽の河原ならぬ石積が出来ている。そのまた隣に、戦後になって暖炉の礎石が発見される。今日ソローの小屋(跡)は都合三つ存在しているわけだ。

ソローの書き物机の本物は、コンコードの美術館、移転復元されたエマーソンの書斎の隣に置かれている。裏手の「眠たい」墓地の文士の岡には、オールcott親子、大理石のエマソンから、ソロー、ホーソンの墓石まで一堂に並んでいて、まるで鎌倉の東慶寺。

そこから街道を東に7キロほど走ると、ミニユットマン来訪者センター。入場すると、目前には、敗走するイギリス軍を狙撃する植民地精鋭民兵を描いた、横10メートルを超える大パノラマ戦争画。講堂ではマルチ・メディアのプログラムが30分ごとに上演されていて、ナレーターは、戦闘直後に現場を踏んだラルフ・アールのスケッチを銅版画にしたアモス・ドーリットル、という設定だ。別のビデオ・プログラムはポストン茶会事件周辺に基づく史劇仕立ての歴史物語。

話は飛ぶが、オーストラリアには建国神話が成り立たない、といった議論を、中村和恵の『キミハドコニイルノ』で読んだ記憶がある(彩流社)。「独立戦争がついにおこらなかつた植民地特有の、存在の不確かさ」。革命を断行した北米とは違って、先祖は徒刑囚やら苦力やらの南半球の大国では、歴史の教科書の冒頭がどうしても様にならない、とはニューキャッスル大学のリース・モートンさんの話だった。自由と独立を勝ち取ったという強力な国民国家意識の欠如が、ひいては北米超大国に対する劣等意識にも結び付く。欲望としての国民史。思えば「ミニユットマン」の名は、(今や廃棄された)臨戦対応の大陸間弾道弾に引き継がれていた。

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美

思

考

の

隅

景